

平成 21 年度 普及に移す農業技術（第 1 回）

- [分 類] 普及技術
[成果名] あんずのアブラムシ類防除にバリアード顆粒水和剤が有効である
[要 約] あんずのアブラムシ類防除にバリアード顆粒水和剤 4,000 倍液を散布する。蚕毒が強いので、桑園付近では使用しない。
[担 当] 果樹試験場 環境部
[部 会] 病虫部会

1 背景・ねらい

あんずのアブラムシ類防除薬剤を充実するため、収穫前日まで使用できるバリアード顆粒水和剤の実用性を検討したところ有効性が認められたため、今回普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

- (1) あんずのアブラムシ類防除にバリアード顆粒水和剤 4,000 倍液を散布する。

農薬登録内容

バリアード顆粒水和剤

[一般名及び成分含量] チアクロプリド 30%

[毒性] 人畜毒性：劇物 [魚毒性] A 類

[対象作物に対する適用登録状況（平成 21 年 9 月 25 日現在 JPP ネット確認）]

作物名	適用害虫名	希釈倍数	使用時期	本剤及びチアクロプリドを含む総使用回数	散布液量	使用方法
小粒核果類 (うめ、すももを除く)	アブラムシ類	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	200～700 リットル/10a	散布

3 利用上の留意点

- (1) 本剤はネオニコチノイド系殺虫剤である。優れた浸透移行性と残効性を併せもつ。
(2) 蚕毒が強いので、桑にかからないよう桑園付近では使用しない。
(3) 「信州大実」など、品種によっては葉に極軽い薬害（穴あき症状）が生じることがある。
(4) あんずでのアブラムシ類の重要な防除時期は 4 月～5 月上旬である。
(5) 本剤はミツバチ・マルハナバチに対する影響は比較的少ないが、マメコバチには影響があるので注意する。
(6) アブラムシ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、年 1 回の散布とし、他剤とローテーションで使用する。

4 対象範囲

県下全域

5 具体的データ

- (1) 平成 17 年の試験では、バリアード顆粒水和剤はウメコブアブラムシに対し、対照のアトマイヤ - フロアブルと同等の高い防除効果が認められた (表 1)。あんずに対する薬害は見られなかった。
- (2) 平成 21 年の試験でも、バリアード顆粒水和剤はウメコブアブラムシに対し、高い防除効果が認められた (表 2)。あんずに対する薬害は見られなかった。

表 1 あんずのウメコブアブラムシに対するバリアード顆粒水和剤の防除効果

(平成 17 年、果樹試験場)

	希釈 倍数	1 新梢当たり無翅虫数				薬害
		散布前	3 日後	7 日後	14 日後	
バリアード顆粒水和剤	4,000	160.9	0.0	0.0	0.0	無
アトマイヤ-フロアブル	5,000	159.1	0.0	0.0	0.0	無
無 散 布	-	138.9	184.1	234.5	369.0	

試験場所：果樹試験場内ほ場 品種：「信陽」 区制：1 区 1 樹 2 反復

発生状況：中発生

薬剤散布：5 月 9 日に動力噴霧器を用い 1 樹当たり 40 リットルを散布した。展着剤はアグラ-5,000 倍を加用した。他の殺虫剤は使用しなかった。殺菌剤は慣行による。

調査方法：1 樹当たり 10 新梢にラベルを付け、散布前 (5/9)、散布 3 日後 (5/12)、7 日後 (5/16) および 14 日後 (5/23) にその新梢に寄生する無翅虫数を調査した。

表 2 あんずのウメコブアブラムシに対するバリアード顆粒水和剤の防除効果

(平成 21 年、果樹試験場)

供 試 薬 剤	希釈 倍数	1 新梢当たり無翅虫数					薬害
		散布前	3 日後	7 日後	14 日後	21 日後	
バリアード顆粒水和剤	4,000	42.0	0.0	0.0	0.0	2.3	無
無 散 布	-	46.9	95.5	308.1	380.1	199.9	

試験場所：果樹試験場内ほ場 品種：「信陽」 区制：1 区 1 樹 2 反復

発生状況：中発生

薬剤散布：5 月 8 日に動力噴霧器を用い 1 主枝当たり 10 リットルを散布した。展着剤はマイリノー10,000 倍を加用した。他の殺虫剤は使用しなかった。殺菌剤は慣行による。

調査方法：1 主枝当たり 10 新梢にラベルを付け、散布直前 (5/8)、散布 3 日後 (5/11)、7 日後 (5/15)、14 日後 (5/22) および 21 日後 (5/29) にその新梢に寄生する無翅虫数を調査した。

6 特記事項

[公 開] 制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]

特異発生害虫の生態解明と防除法確立、平成 17、21 年度 (2005、2009 年度)、県単素材開発